慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フランス語版 『資本論』第一巻第二章「交換過程」の研究：ドイツ語本文との比較対照
Sub Title	The study of the French version of Das Kapital, vol. 1, chap. 2 : exchange-process, as compared with the German original
Author	遊部, 久蔵
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1973
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.66, No.12 (1973. 12) ,p.924(30)- 931(37)
JaLC DOI	10.14991/001.19731201-0030
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19731201-0030

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

フランス語版『資本論』第一巻第二章「交換過程」の研究

——ドイツ語本文との比較対照——

遊　部　久　蔵

本稿はさきに発表した「フランス語版『資本論』第一巻第一章『商品』の研究」(本誌第64巻第2・3合併号，昭和46年2月。拙著『商品論の構造』青木書店，昭和48年所収)の続稿である。ここで対象とされるテキストは前回の研究でのそれと全く同じであるが，再び一覧表として以下に示しておく。

1. ロワ訳とよばれ，ここで対象とされているフランス語版。Le Capital par Karl Marx. Traduction de M. J. Roy, entièrement revisée par l'auteur, 〔Livre premier〕 Paris, Editeurs Lachâtre, 1872—1875. (記号Fでこれを示す。)

2. 現行版。K. Marx: Das Kapital, Bd. 1, in: K. Marx/F. Engels Werke, Bd. 23, Berlin, Dietz Verlag, 1962. 大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス＝エンゲルス全集』第23巻，大月書店，昭和40年(記号Dでこれを示す)。

3. 初版。K. Marx: Das Kapital, Bd. 1, Hamburg, Verlag von Otto Meissner, 1867.

4. 第2版。K. Marx: Das Kapital, Bd. 1, zweite verbesserte Auflage, Hamburg, Verlag von Otto Meissner, 1872～1873.

5. カウツキー版。K. Marx: Das Kapital, Bd. 1, Volksausgabe, herausgegeben von Karl Kautsky, Stuttgart J. H. W. Dietz, 1914.

6. 英訳。Karl Marx: Capital, Vol. 1, translated by Samuel Moore and Edward Aveling and edited by Frederick Engels, Moscow, Foreign Languages Publishing House, 1961.

7. Gallimard 版。K. Marx: Le Capital, livre premier. Traduction par Joseph Roy, revue par Maximilien Rubel, en: Karl Marx Œuvres, Économie, tome 1 (Bibliothèque de la Pléiade), Paris, Éditions Gallimard, 1965.

8. 『経済学批判』。K. Marx: Zur Kritik der politischen Ökonomie (1859), in: K. Marx/F. Engels Werke, Bd. 13, 1961. 杉本俊朗訳，国民文庫，大月書店，昭和41年。

なお引用文中の原文でイタリック，ゲシュペルトの部分には傍点を付した。引用文中の〔　〕内の文章は私の文章である。

対照のさいの記号の意味を後出の項目4のそれについて例示する。

D. S. 102. ①. Z. 1—7. 訳。P. 117.——上記の文献リスト中の2の S. 102. 第1パラグラーフ。1行目—7行目。同訳。P. 117.

F. P. 35. II. ②. L. 4—14.——上記の文献リスト中の1の p. 35. 右欄〔左欄はIで示す。〕第2パラグラーフ。4行目—14行目。

(なお，さしあたり，この研究は，ひきつづき，第3章「貨幣または商品流通」までおこなわれ，その成果が逐次公表されるはずである。)

1. D. S. 99. 訳. P. 113. 第2章の標題。「交換過程」„Der Austauschprozeß"

F. P. 34. 第2章の標題。「交換について」《Des Échanges》

(付注)　この第2章の標題は初版では「諸商品の交換過程」„Der Austauschprozess der Waaren" とある。(但し初版ではこれは第1章「商品と貨幣」の2としての標題である。) カウツキー版はしばしばロワ訳での変更を採用しているが，第2章の標題は現行版のそれと同じである。第2版以後第2章の標題は現行版のそれ

となった。英訳では，「第2章交換 (Exchange)」とあってロワ訳にしたがっている。

2. D. SS. 99-100. Fußnote 38. 全文。訳. P. 114.

「プルードンはまず第一に，正義〔カウツキー版に「正義」なし〕，永遠の正義というかれの理想〔傍点部分は初版でゲシュベルト〕を，商品生産に照応する法的諸関係から汲みとる。ついでに言えば，これによって，商品生産という形態も正義と同様に〔wie. 初，再版＝als〕永遠だというすべての俗物にとって大いに慰めになる証明も与えられるのである。次にかれは，逆に，現実の商品生産やそれに照応する現実の法をこの理想にしたがって改造しようとする。物質代謝の現実の諸法則を研究して〔初，再版ともここでコンマ〕これらの諸法則を基礎として，一定の課題を解決しようとはしないで，その代わりに『自然状態』や『親和力』という『永遠の理念』によって物質代謝を改造しようとする化学者について，ひとはなんと考えるであろうか？ ひとが，高利は『永遠の正義』や『永遠の公正』〔再版『永遠の』公正〕や『永遠の相互扶助』やその他の『永遠の真理』と矛盾すると言うとき，ひとが『高利』について知るところは，教父たちが，高利は『永遠の恩寵』や『永遠の信仰』や『神の永遠の意志』と矛盾すると言ったとき，かれらが高利について知っていたところよりも，はたしてより多いであろうか？」

F. P. 34. note 2. 全文。

「多くの人々は商品生産に基づく社会にその起源を有する法的諸関係からかれらの正義の理念を汲みとる。ついでにいえば，これはかれらにこの生産様式も正義自体と同ように長い間持続するであろうという証明を気持ちよくあたえるのである。つぎに実際の社会から引き出されたこの理念の中から，かれらはこの社会とその法とを改革するためのかれらの支点を取出す。物質的結合の諸法則を研究して一定の諸問題をこの基礎に基づいて解決するかわりに『親和力と自然状態との永遠の理念』によってこれらの結合を変化させようと欲する化学者について人はなんと考えるであろうか？ たとえば，ひとは高利が『永遠の正義』や『永遠の平等』と矛盾しているというとき，高利について，教父たちが高利の『神の永遠の恩寵や永遠の信仰や永遠の意志』との矛盾を宣言して同様にのべたときにかれらが知っていたよりもより多くのことを知っているであろうか？」

（付注） Gallimard 版，P. 620 編注 1 (p. 1640) に曰く。「原本では『プルードンはかれの理想を…汲みとる』とある。マルクスは――みられるように――フランスの読者の感情を大切にしている。」この個所の Éditions Sociales 版編注 (p. 95) にも「多くの人々」がドイツ語初版では「プルードン」であるとしるされている。同様の配慮が第1章「商品」中にもなされていることについては，前出拙稿，p. 62 の項目 26 の付注（前出拙著，p. 272 所収.）参照。なおドイツ語原文の「物質代謝の諸法則」(„Gesetze des Stoffwechsels") はロワ訳では「物質的結合の諸法則」(《lois des combinaisons materielles〔Gallimard 版では materielles は moléculaires とある。ちなみにこの個所の所々にロワ訳にないコンマが Gallimard 版と Éditions Sociales 版とにはあるが，いちいちしるさぬ。〕》)，英訳では「物質の結合と分解とにおける分子変化の諸法則」("laws of the molecular changes in the composition and decomposition of matter") とある。(p. 84) Gallimard 版，p. 620 編注 2 (p. 1640) 参照。

3. D. S. 100. ②. Z. 16-17. ③. Z. 1-2. 訳. P. 115.

「それ故，諸商品は諸使用価値として実現されうるまえに諸価値として実現されなければならない。

他方では，諸商品は諸価値として実現されうるまえに諸使用価値として実証されなければならない。」〔傍点部分は初版でゲシュベルト〕

F. P. 35. I. ①. L. 10-13. ②. L. 1-3.

「それゆえ，諸商品は，諸使用価値として実現しうるまえに，諸価値として現われなければならない。

他方では，諸商品が諸価値として実現しうるまえに，それらの使用価値が証明されなければならない。」

（付注） ドイツ語本文とフランス語本文との間にたちいってみると表現上の相異が存するが，しかしそれは意味上の相違を示すものではないと思われる。だがここで意味とはなんであろうか。おそらく商品の二要因の使用価値と価値との同一性が注目されて，商品の使用価値としての実現，それと同じ意味での商品の使用価値としての証明あるいは商品の使用価値の証明と商品の価値としての実現とがおたがいに前提しあっていることをのべたものであろう。つまりこの双方は商品の交換過程において同時的に遂行される両側面であり，したがってここで「まえに」(„bevor") (《avant》) とのべられているのは，時間上の意味ではなく，時間的には同時的な事象の論理的関係を指すと思われる。この点については，上文にひきつづく文章をみることで一層あきらかとなるであろう。この部分は独仏文間に相異がないのでドイツ語本文を引用しておく。曰く。「なぜなら，諸商品に支出された人間労働は，ただ他人

にとって有用な形態で支出されているかぎりでしか，数にはいらないからである。ところが，その労働が他人にとって有用であるかどうか，したがってまたその生産物が他人の欲望を満足させるかどうかは，ただその労働の交換だけが証明することができるのである。」(SS. 100—1; 訳. p. 115)

ここで注意すべき点は「商品の使用価値としての実現」が「商品の使用価値の実現」のように商品の消費を意味しないで，むしろ「商品の使用価値としての実証」と同意義であって，商品の交換過程が使用価値の側面からみられたものにほかならないということである。上文中の「商品の使用価値としての実現」を「商品の使用価値の実現」と同じように商品の消費と解すると，上文は全く意味のわからないものになってしまうであろう。この点について久留間鮫造氏のつぎの見解が参考となる。曰く。「なお念のために一言しておくが，この使用価値としての商品の実現ということは，使用価値の実現ということとはちがうので，使用価値の実現というのは，一定の欲望の充足に役立ちうる属性を物がもっている，それを実際に役立たすこと，すなわち物がもっているそういう可能性を実現することであって，これはいうまでもなく消費の過程でおこなわれる。これに反して，使用価値としての商品の実現は交換過程上の問題であって，消費過程上の問題ではない。商品の使用価値は，単なる使用価値ではなくて，一定の社会的規定性をもつ使用価値である。すなわちそれは，現にそれを商品としてもっている者のための使用価値ではなくて，他人のための使用価値である。だからそれは，それを必要とする他人の手に移らねばならぬ。そうすることによってはじめて，使用価値として実際に役立ちうることになる。マルクスが『使用価値としての商品の実現』といっているのは，このことをさすのであって，消費の過程においてではなく，交換の過程において行われる。」(同著『価値形態論と交換過程論』岩波書店，昭和32年，pp. 14—15) ちなみに久留間氏は「価値としての商品の実現」と「価値の実現」とを区別し，前者を W—W (商品の商品との交換)，後者を W—G (商品の貨幣による販売) と解されていることも注意されてよい。(pp. 15—16)

大島雄一氏はこの個所のロワ訳文を引用され，つぎのように訳出されている。(同著『価格と資本の理論』未来社，昭和40年，pp. 134-5) 以下にみる氏の解釈は氏の訳文とも関係があるかもしれないので念のため原文と訳文とを引用しておく。

《Il faut donc que les marchandises se manifestent comme valeurs, 〔Gallimard 版では，ここにコンマなし〕 avant qu'elles puissent se réaliser comme valeurs 〔大島氏引用では valeur〕 d'usage. 〔大島氏引用では，ここで改行しない〕

D'un autre côté, 〔大島氏引用では，ここにコンマなし〕 il faut que leur 〔大島氏引用では leurs〕 valeur d'usage soit constatée avant qu'elles puissent se réaliser comme valeurs; …》

氏の訳文。「諸商品はみずからを諸使用価値として実現しうる前に，諸価値としてみずからを表現しなければならぬ。他面では諸商品はみずからを諸価値として実現しうる前に，それらの使用価値が承認されなければならぬ。」

氏の訳文は拙訳とやや異なる点もあるが大差ないものと思う。したがって私見とは異なる氏の次述の見解は訳文上の相違によるものでないかもしれないが念のため引用したのである。

大島氏はこの個所のロワ訳文ではドイツ語本文の「訂正」(p. 134, 135) がおこなわれたとみて，この「訂正」の「真意」をつぎのように解釈されている。

曰く。「右のマルクスの規定〔本項目で引用された文章での規定〕は，成心なく読めば，諸商品の使用価値としての『実現』の前には，それの価値としての『表現』が必要であり，価値としての実現の前には，それの使用価値としての『承認』が必要であること，またこの二つのことは同一事態の両側面をなすことを示すものであるといえよう。要するにこの規定は，諸商品が使用価値および価値として実現しうるためには，そのまえに，その中で価値『表現』と使用価値『承認』がなされる価値関係が展開されねばならないことを示唆しているのであって，『使用価値としての実現』と『価値としての実現』との対立関係を示唆するものでないといえる。

このマルクスのフランス語版での訂正がいかなる意図にもとづくものかは不明である。だがこの訂正の方向は『使用価値としての実現』と『価値としての実現』の対立を強調する方向ではなくて，商品の価値および使用価値の実現にさき立っての，価値関係の成立の意義を強調する方向であることは確かだろう。それは，本書第二章で示したような，交換過程の矛盾を価値関係そのものの成立の困難のうちに設定しようとする方向にほかならないといえる。」(p. 154)

氏の誤謬はこの個所のロワ訳文がドイツ語本文と表

現上異なる点に注目してこれを「訂正」と解する点にある。しかしこのロワ訳文をもって「訂正」と解し上文のようにそこでの本来の問題を交換関係の前提としての価値関係の成立の意義を強調したものと解したばあい，はたしてドイツ語本文と全く同じ展開がなされているこの文章の前後の叙述との関係をどう解するかが問題となるであろう。私がここでのロワ訳文には上記のようにドイツ語本文とやや異なる点があるが，実質上同趣旨のものと解するのはこの理由によるのである。また価値関係ではなく交換関係を論じるここ（第2章）でふたたび価値関係の成立の意義を強調するというのも理解しがたい点である。もっとも大島氏の解釈のうまれる根拠であるロワ訳文のドイツ語本文との表現上のちがい中，とくに《se manifestent comme valeurs》は文字通りにとればそれ自体価値関係に属するから，私もこの表現には納得しがたいものを見出すことを付言しておく。

ちなみに本項目のドイツ語本文に該当する文章としてつぎの二つの文章を『経済学批判』中より引用するとしよう。

(イ)「だから商品は交換価値として実現されることによってはじめて使用価値として生成しうるのだが，他方ではその譲渡において使用価値として実証されることによってはじめて交換価値として実現されうるのである。」(S. 29. 訳. p. 46)

(ロ)「私たちがまずはじめにつきあたった困難は，商品は交換価値として，対象化された労働としてあらわれるためには，あらかじめ使用価値として譲渡され，人手にわたっていなければならないのに，使用価値としてのその譲渡は，逆に交換価値としてのその定在を前提するということであった。」(S. 31. 訳. p. 48)

ここの(ロ)で「商品は交換価値として，対象化された労働としてあらわれる……」とか，「交換価値としてのその定在」という文章がそれ自体としては価値関係を意味し交換関係を意味せず，そのかぎり表現上，上記のロワ訳文の《se manifestent comme valeurs》と類似していることに注意されたい。

4. D. S. 102. ①. Z. 1—7. 訳. P. 117.

「交換の歴史的な拡大と深化とは，商品本性のうちに眠っている使用価値と価値との対立を展開させる。この対立を交易のために外的に表わそうという欲求は，〔再版ではここにコンマなし〕商品価値の独立形態へと駆りたて，商品と貨幣とへの商品の二重化によって最終的にこの形態が達成されるまでは，〔再版ではここにコンマなし〕休止しない。」〔この一文は初版ではつぎのとおりである。「使用価値と交換価値との直接的統一としての，有用的な諸労働の一つの自然生的な全体系あるいは分業の単に個別的な一関節をなしている有用的な私的労働の生産物としての・及び抽象的・人間的労働の直接的に社会的な物質化としての，商品の内在的な矛盾——この矛盾は，それが商品の商品と貨幣とへの二重化の形をとるまでは，休止しない。」(S. 48)〕

F. P. 35. II. ②. L. 4—14.

「交換の歴史的発展は，諸労働生産物にますます商品の性格を刻印し，同時にその本性が包蔵している対立，使用価値と価値との対立を展開させる。商業の欲求自体は無理にこの対立に実体をあたえようとし，明白な価値形態を生ぜしめる方向に向い，この形態が商品の商品と貨幣とへの二分によってついに獲得されるまでもはや休止させない。」

5. D. S. 102. Fußnote 40. Z. 1—4. 訳. P. 117.

「これによって，小ブルジョア的社会主義の狡猾さを判断せよ。それは，商品生産を永遠化しようとしながら，同時に『貨幣と商品との対立』を，したがって貨幣そのものを——というのは貨幣はただこの対立においてのみ存在するのだから——廃止〔傍点部分は初版でゲシュペルト〕しようとするのである。それができるなら，教皇を廃止して〔初，再版＝ここでコンマ〕カトリック教を存続させることもできるであろう。」

F. P. 35. II. Note 1. L. 1—5.

ドイツ語本文第1行目の「小ブルジョア的社会主義」がロワ訳では「ブルジョア的社会主義」(le socialisme bourgeois) とある。また「それができるなら，……存続させることもできるであろう。」は，ロワ訳には削除されている。

（付注）ドイツ語本文の「小ブルジョア的社会主義」がロワ訳では「ブルジョア的社会主義」とあるのは何故か，明確にこたえることはできないが，末文のローマ教皇についての比喩の削除とともに「フランスの読者の感情を大切にしている」（前出項目2，付注参照）からであろうか。また，プルードンが『共産党宣言』ではブルジョア的社会主義に分属されていることを想起すると，ここで「ブルジョア的社会主義」としるすことで当面プルードンが念頭におかれているのかもしれない。ちなみに，上に引用した文章のつづきで独仏版ともに参照をもとめている『経済学批判』の該当個所(SS. 66—69. 訳. pp. 104—9) で批判されているのがいわ

ゆる「リカード派社会主義者」のグレイであり，なおそこではトムソン，ブレイ，プルードン，ダリモンへの言及がある。

6. D. S. 105. ①. Z. 9～106. ① Z. 7. 訳. PP. 120—121. (中略あり)

「他方，この誤り〔貨幣を単なる章標とみなす誤り〕のうちには，物の貨幣形態はその物自身にとって外的なものであって，その背後に隠された人間諸関係の単なる現象形態〔傍点部分は初版でゲシュペルト。以下同じ〕であるという予感があった。……しかしひとは一定の生産様式の基礎の上で諸物象が受取る社会的諸性格，〔初，再版＝ここでコンマなし〕または労働の社会的規定が受取る物象的諸性格を単なる章標だと説くことによって，同時にこのような性格を人間の恣意的な反省の産物だと説くのである。これこそは，18世紀に愛好された啓蒙の流儀だったのであって，その成立過程をひと〔man. 初版＝es〕がまだ闡明することができなかった人間諸関係の謎のような姿から少なくともさしあたり〔初版＝さしあたり少なくとも〕奇異の仮象だけでもぬぐい取ろうとしたのである。」

F. P. 37. I. ②—II. ①. (中略あり)

以下の文章はフランス語版では改行されてはじまっている。

「他方，この誤りは外的事物の外観のもとに〔Éditions Sociales 版では sous の前にコンマ〕貨幣が実は一つの社会関係を隠くしていることを予感させるということは真実である。……しかし人がもはや特定の生産様式の基礎の上で事物がおびる社会的諸性格のうちに，あるいは労働の社会的諸規定がおびる物質的諸性格のうちに単なる章標のみしかみない以上，それらにいわゆる人間の一般的合意によって容認された因襲的擬制の意義を賦与することとなる。〔Éditions Sociales 版，以下改行〕これは18世紀に流行した説明法であった。人はまだ社会諸関係の謎的諸形態の起源も発展も解決することができなくて，それらが人間の発明であり，天から降ったものではないと宣言してかたづけたのである。」

(付注) カウツキー版がしばしばロワ訳本の訂正にしたがって訂正をおこなっていることは，すでにのべたが，この項目の部分でつぎのような変改がある。すなわち「人間の恣意的な反省の産物」(„willkürliches Reflexionsprodukt der Menschen") が「いわば人類の一般的同意によって認可された人間の追思惟の恣意的な産物」(„willkürliches Produkt des Nachdenkens der Menschen, sanktioniert durch die sozusagen allgemeine Zustimmung der Menschheit") とあり，つぎのパラグラーフにうつる前に下記の一文が附加されて「啓蒙の流儀」が説明されている。「人はまだ社会的諸関係の不可解な諸形態の起源と発展とを暴露することができなかったので，それらが人間の発明であって天から降ったものではないと説明することにより，その不思議な性格を取り去ろうと企てたのであった。」(S. 54)

7. D. S. 106. Fußnote 47. Z. 3—5. 訳. P. 122.

「価値の概念を考察するならば，物象自体はただ章標とみなされるのであって，物象はそれ自体として意義を有するのではなく，それが値するところのものとして意義を有するのである。」(G.W.F. Hegel: Philosophie des Rechts. Berlin. 1840. S. 100. 岩波版『ヘーゲル全集』第9巻，速水敬二・岡田隆平 共訳『法の哲学』昭和25年，p. 104)

F. P. 37. I, II. Note 3. に上文はない。

(付注) Gallimard 版にはこの一文が，p. 627 編注 1 (p. 1640) としてある。またそれは Éditions Sociales 版編注 (p. 101) にもある。ちなみに初版，再版，カウツキー版のいずれにもこの一文がある。

8. D. S. 106. ②— 107. ①. 訳. P. 123.

「さきほどのべたように，一商品の等価形態は，その価値量〔傍点部分は初版でゲシュペルト。以下同じ。〕の量的な規定を含んではいない。金が貨幣であり，したがってすべての他の諸商品と直接に交換されうるものだということを知っていても，それだからといって，たとえば10封度の金にどれだけの価値があるかがわかるわけではない。どの商品とも同様貨幣*はそれ自身の価値量をただ相対的に他の諸商品で表現することができるだけである。貨幣*自身の価値は，貨幣*の生産に必要な労働時間によって規定されていて，同じだけの労働時間が凝固している他の各商品の量で表現される。この貨幣*の相対的価値量の確定は，その産源地での直接的物々交換でおこなわれる。それ*が貨幣として流通〔初版＝交換過程〕にはいるやいなや，その価値はすでに与えられている。すでに17世紀の最後の数十年間に貨幣分析の端緒は，かなり踏み越えられていて，貨幣は商品だということが知られていたとしても，それはやはり端緒でしかなかった。困難は，貨幣が商品であるのを理解することにあるのではなく，いかにして (wie)，なぜ (warum)，なにによって (wodurch)，商品は貨幣であるのかを理解することにある のである。」(この訳文中の語句に付したアステリスク＊の意味について

は，付注をみよ。）

F. P. 37. II. ②.

「私たちはすでに一商品の等価形態がその価値量の総額についてなにも知らせないということを指摘した。たとえ人が金 (or) が貨幣 (monnaie) であり，すなわちすべての諸商品と〔ここのロワ訳の avec toutes les marchandises が Éditions Sociales 版では avec のかわりに contre とある。〕交換されうると知っても，それだからといって人はたとえば10リーヴル〔10£—Gallimard 版〕の金がどれだけに価するかということを知らないのである。すべての商品と同様に，貨幣 (argent) はそれ自身の価値量をただ相対的に〔Éditions Sociales 版では relativement の前にコンマ〕他の諸商品で表わすことができるだけである。貨幣自身の価値は，その生産に必要な労働時間によって規定され，同一の時間の労働を必要としたすべての他の商品の量で表わされる。この貨幣の相対的価値量の確定は，その産源地自体で貨幣の最初の交換でおこなわれる。それが貨幣 (monnaie) として流通にはいるや否や，その価値は与えられている。すでに17世紀の最後期に，貨幣 (monnaie) が商品であるということはよくみとめられてはいたが，だが分析はその第一歩にあったにすぎない。困難は貨幣 (monnaie) が商品であることを理解することに存しないで，いかにして (comment)，なぜ (pourquoi)，一商品が貨幣 (monnaie) となるかを理解することに存している。」

（付注） この両文はみられるように大差ないが，ここでは二つの点に注意するために全文の引用を必要とした。

1. ドイツ語版の本訳文7行目以下13行目までにしるされている「貨幣」(Geld) ——上記の訳文中のアステリスク＊を付した個所——が「金」(Gold) の誤記・誤植ではないかという指摘がこれまでしばしばなされてきており，またその一根拠としてロワ訳がひきあいにだされてきているので，これについて一言しなければならない。

たとえば，向坂逸郎氏の訳注にいう。「すべての商品と同じように，金〔カウツキー版・ポール英訳版では金，初版から第3版までは貨幣，エンゲルス版も貨幣，アドラツキー版・ディーツ『全集』版も貨幣であるが，前後の関係から金とした。……訳者〕は……」（岩波書店，昭和42年，pp. 120—1）

長谷部文雄氏のここの訳注にいう。「仏訳，露訳では『金』，その方が正しく，『貨幣』は初版いらいの誤植と思われる。」（河出書房版『世界の大思想』第18巻，昭和39年，p. 82）同氏訳『資本論初版鈔』（岩波文庫，昭和4年）のこの部分 (p.129) では，Geld が金と訳されている。

当面問題とされるのはロワ訳文であるが，上記についてみていただきたい。そこには，「すべての商品と同様に，貨幣 (argent) は，……」とあり，長谷部氏はおそらくこの《argent》を銀とよまれたものであろうか。しかしこの《argent》はいうまでもなく貨幣とも訳しうるのであり，したがってつぎのセンテンスの《sa valeur propre》の sa はやはり「貨幣の」とも訳しうるのである。この《argent》の訳語としての困難さについては第1章の部分のロワ自身の訳注でもしるされている。この点については前出拙稿，p. 62（拙著『商品論の構造』pp. 272—3 所収）参照。したがって長谷部氏の訳注で「仏訳……では『金』」とあるのは必ずしも正しくない。（もっとも正確には「金」でなく「銀」であることはここでは問題としない。）また向坂氏の改訂の理由は「前後の関係から」とあるが，はたして「前後の関係から」そこでの「貨幣」は「金」でなければならないであろうか。前引の独仏両文をみていただきたい。まずドイツ語本文では，問題になっている文節の前の文節では「金が貨幣であり……」とあって金が主語であるということが理由とされたのであろう。フランス語訳文の方も先行する文節は「……金が貨幣であり……」とある。だがそうであるからといってつぎの文節の主語が必ずしも金である必要はないであろう。かりにつづく文章での主語が金であるとしてそこでは金の絶対価値（内在的価値）と相対価値（外在的価値）とについてのべられているのであるが，このばあいの金はもちろん商品としての金ではなく貨幣としての金が対象とされているのであるから，実体としての金よりも形態としての貨幣の方に重点をおいておそらくマルクスは「金」ではなく「貨幣」としるしたのではなかろうか。なおフランス語訳文ではみられるように先行する文節の主語が金 (or) であるのにつづく文節の argent を「銀」（「金」ではない）と訳すのはおかしいであろう。どうしてもここの argent は貨幣と訳さざるをえないであろう。もっともフランス語訳の後段であらたに貨幣が monnaie の語であらわれるので，はじめの argent は銀というふうに解されうるかもしれない。しかし上記の第1章の訳注にみられるようにロワ訳本では argent と monnaie とはつねに同じ意味で使用されているのである。（同訳注への Gallimard 版編注もみよ。）だが，

しかしここの Geld はこれを Gold としるしても，それほど全体の文意にはえいきょうないのではなかろうか。上にしるしたようにここでは Geld は Gold の形態，Gold は Geld の実体という密接不可分の関係に両者がおかれているからである。ただ，向坂氏訳では「前後の関係から」，長谷部氏訳では「仏訳…では『金』」とあるので，あえてここでのべたまでである。また向坂氏，長谷部氏の訳注でのべられているようにこの個所の「貨幣」がカウツキー版(S. 54)，ロシア語版(Сочинения, том 23, стр. 101)，ポール英語版(Everyman's Library. pp.67-68. 但し前出のモスクワ版の英語版では "money" とある。p. 91) では「金」とあるからである。

2. だがここでより重要な問題はつぎの問題である。ちなみに長谷部氏訳，青木文庫版第1分冊（昭和26年）では，さらにこの部分の訳注として，つぎの文節，「すでに17世紀の最後の数十年間に…端緒でしかなかった。」のフランス語訳の邦訳――それはドイツ語本文とほとんど同文である。――がかかげられているが，決定的に重要な，つぎの最後の文節での相異がみおとされている。すなわちドイツ語本文では，「いかにして，なぜ，なにによって，商品は貨幣であるのかを理解すること」とあるのがフランス語訳文では，「いかにして，なぜ，一商品が貨幣となるかを理解すること」とあって「なにによって」が欠けている点が注目される。(ちなみに初版，再版，カウツキー版，英訳のいずれにも「なにによって」がある。但しロシア語訳には「なにによって」がなく，「いかにして」(«как»)，「なぜ」(«почему»)があるだけである。стр. 102))なぜ私がこの点に注目したかというと，この「いかにして，なぜ，なにによって」ということが貨幣の成立を説明する上での三つの段階を意味するものと解し，それぞれを『資本論』第1巻第1章第3節，第4節，第2章に該当するものと解するかなり有力な見解が存するからである。この見解をはじめてのべられたのは，三宅義夫氏である。氏は上引のマルクスの文章を引用してから曰く。「いかにして，なぜ，なにによって，商品が貨幣であるか，あらねばならぬか，を把握することは，第一に，商品の交換価値を，つまり商品の価値表現を追究して一般的価値形態に至り，そして貨幣形態の発生を見出すことによって，第二に，なぜ労働が価値においてみずからを表示するかという商品物神を，したがってまた貨幣物神を明かにすることによって，そして最後に，交換過程において，『他のすべての諸商品の社会的行動が，よってもってそれらが自分たちの諸価値を全面的に表示するところの，ある一定の商品を排除する』ことを，反対側からいえば，『一般的な等価たることが，社会的過程によって，その排除された商品の独自的，社会的な機能となる。』(…〔長谷部氏訳。青木文庫，第1分冊，p. 195. 角川文庫，第1分冊，p. 138—9〕) ことを明かにすることによって，それぞれなしとげられているわけである。かくて第三章は，第一章での価値形態論，物神性の解明，第二章の交換過程論をうけて，それらを直接の基礎としているものである。」(三宅義夫「貨幣」，『講座・資本論の解明』第2分冊，理論社，昭和26年。pp 7—8. のちに同著『貨幣信用論研究』未来社，昭和31年所収，pp. 13—14)

さらにこの点を一層明確にのべられているのは，久留間鮫造氏である。曰く。「……今やわれわれは次のようにいうことができる。価値形態論では貨幣の『如何にして』が論じられ，物神性論ではその『何故』が論じられるのに対して，交換過程論ではその『何によって』が論じられるのであると。マルクス自身も……こう書いている。『困難は，貨幣が商品であることを把握する点にあるのではなく，如何にして，何故に，何によって wie, warum, wodurch 商品が貨幣であるかを把握する点にある。』…ここでのこれらの三つの困難の指摘が，同時に，彼自身が見事にそれらを克服したことを暗示していることは明らかであるが，どこでそれをなしとげたかについては何らの暗示をあたえていない。わたくしは，この『如何にして』と『何故に』と『何によって』とが，それぞれ，第一章の第三節と第四節と第二章とで答えられているものと解するわけであるが，これによるとマルクスは，ここで三つの困難を指摘したさいに，彼がそれらを『資本論』で克服した順序にしたがってあげたのだ，ということになるであろう。」(久留間鮫造著『価値形態論と交換過程論』，前出，pp. 40—41)

このような見解を忠実に基礎にしてマルクスの貨幣発生論を解説されたのが，小林威雄氏著『貨幣の基礎理論』青木書店，昭和44年，第1篇である。また山本二三丸氏は上記の久留間氏の文章を引用されてつぎのようにのべられている。曰く。「…久留間氏の『価値形態論と交換過程論』は，たんに第一章第三節についてのきわめてすぐれた考察を示しているばかりでなく，第一章第四節および第二章についてもそれぞれの意義および内容を，厳密にマルクスの方法にしたがって考察し，同じくすぐれた論究をおこなって，これら三つの相互の関連，『位置づけ』を与えている…」(山本二三

丸「原典解説」『資本論講座』第一巻，青木書店，昭和38年，p. 167) 私がさきにこの種の見解を「かなり有力な見解」と評した所以である。

いまこの問題について詳論することはできない。いずれあらためて論じたいと思うが，ここでは上記の見解にたいする三つの疑問をしるしておきたい。(イ)三つの言葉，wie, warum, wodurch のうち，はじめの二つ，wie, warum は意味が明確であるが，wodurch はこの両者にくらべて意味が明確でないことで，この三者がはたして貨幣発生を説明する三段階ないし三局面として対等に並びうるかということである。ロワ訳文で wodurch が削除されたのもこの理由によるのかもしれない。(ロ) wie＝第1章第3節，warum＝第1章第4節，wodurch＝第2章という課題の配当は，それぞれの個所について詳しく検討すると必ずしもこのように明確に分割しがたいものを見出すのである。たとえば第1章第3節にも warum の問題があり，第1章第4節にも wie の問題があるという具合いにである。(ハ) ロワ訳で wodurch が欠落していることを考慮すると，上記のような課題の配当をあらためて考え直す必要があるであろう。ちなみに『経済学批判要綱』中にはつぎのような一文があり，貨幣の成立について「いかにして，また何故に」の語があるにとどまり，むしろこれがマルクスの真意ではないかと思われるのである。曰く。「……価値尺度としての労働時間は，ただ理念的にだけ実存するのだから諸価格の比較の材料としては役立ちえない。(ここで同時に，価値関係が貨幣において一つの物質的な，かつ特殊化された実存を，いかにして，また何故〔wie und warum〕に受けとるかということが明らかになる。……)」(K. Marx: Gundrisse der Kritik der politischen Ökonomie. 1953. SS. 58—59. 高木幸二郎監訳，p. 61)

なお久留間氏の上記の見解にたいする批判としては，宇野弘蔵氏編『資本論研究』第1巻，筑摩書房，昭和42年，pp. 147-8, 252-5 がある。ただしロワ訳文における wodurch の削除については言及していない。あるいはこれが気付かれていないのかもしれない。

9. D. S. 107. ②. Z. 15—108. ①. Z. 6. 訳. P. 124.

「人間の社会的生産過程におけるかれらの単なる原子的な振舞いは，したがってまたかれらの制御やかれらの意識的個人的行為から独立したかれら自身の生産諸関係の物象的な姿は，まずかれらの諸労働生産物が一般的に商品形態をとるということに現われるのである。したがって，貨幣物神の謎は，ただ目に見え目をくらますようになった商品物神〔自体—初版〕の謎でしかないのである。」〔傍点部分は初版でゲシュペルト〕

F. P. 38. II. にない。

(付注) Gallimard 版には p. 630 の編注 (p. 1640) においてロワ訳で「削除」されたこの一文が訳出されている。ちなみに初版，再版，カウツキー版のいずれにもこの一文がある。

(経済学部教授)